

巻 頭 言



平成の開拓使「技術士」

(社)日本技術士会 北海道支部 副支部長
技術士（建設／総合技術監理部門）

齋 藤 有 司

第31回技術士全国大会（札幌）は、9月15日爽やかに澄み渡る青空の下約600名の参加を得、ロイトン札幌において盛大に開催され滞りなく終ることが出来ました。本大会の実行副委員長としまして、ご来賓の皆様、この大会のために2年前から奔走いただいた実行委員の皆様、関係者の皆様、そして当日お忙しい中ご参加いただいた会員の皆様に心から御礼を申し上げます。

今大会においては、技術士が今後、地域社会の中でどのように行動し貢献できるのかを問い、テーマを「社会貢献」と致しました。その背景には、平成12年に技術士法が改正され、科学技術創造立国に貢献する技術士の役割と、倫理観を兼ね備えた公益性が強く求められることになったことがあります。

今大会は、前日に同時開催された「技術者倫理研究事例発表大会」と初の「ウエルカムパーティー」で幕が開きました。発表大会では、北大の佐伯先生の特別講演で、倫理を授業で知識として教えることは不可能であり、倫理の感性を磨きながら、事例による訓練から自立的な解決能力を養うことが大切であるとの報告がありました。我々が技術者倫理を培う基本的な考え方として、深く感銘を受けました。又、サッポロビール園でのウエルカムパーティーは、支部や部会を越えた熱い交流となりました。

大会当日の分科会は、「市民との協働」「地域振興」「海域技術」「都市防災」「青年技術士の役割」の5分科会において、それぞれ「技術士の社会貢献」という同じ視点で熱い意見交換が交わされました。各分科会とも、的を得た報告に加え、ユニークな会場設

定と参加者を巻き込んだ進行パターンに高い評価を受けました。また、式典後の、交流パーティーにおいては、屋台コーナーを始め、道産食材をふんだんに使った料理に、参加者相互の舌も滑らかとなり、交流のボルテージも上がったようでした。とにかく大会も無事に終わり、ほっとするとともに、虚脱状態にあるというのが現在の状況です。

さて、タイトルにある平成の開拓使「技術士」ですが、式典の謝辞でもお話ししましたように、明治2年、石狩の地に降り立った開拓使は、北海道を切り拓くという強い意志と夢をもって、うっそうとした森林と、茫漠とした原野に立ち向かいました。私達技術士も、今こそ、この先人に見習い低迷する北海道の社会経済に立ち向かうため、科学技術の分野で社会に先駆的な貢献をしなければならない時であると感じました。道都大の小野健知先生も述べておられましたが、「先人達に見習うことが3つある。第一は、意識や発想を変えること。第二は、自然と共生すること、第三は、共同（協調）の精神である」と。私達技術士に今求められていること、それは、技術の発展を、豊かな社会環境作りに役立てること。また、そのために一般市民との協調を通し、社会全体に思いやりの心を広げることではないかと思うのです。

この大会を通し、技術士相互の交流から学んだ「社会貢献」の姿勢は、今後も、その輪が大きく広がって行くものと思います。

終わりにになりましたが、大会運営に当たりご指導を頂いた清野技術士会会長を始めとする本部事務局の方々に熱く御礼を申し上げます。